

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 2 日現在

機関番号：34419
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2017～2019
 課題番号：17K02632
 研究課題名(和文) 夢遊状態と二重人格 近代ドイツ心霊主義における自己と無意識をめぐる思考の系譜

 研究課題名(英文) Sleepwalking and Dual Personality, the Genealogy of Thought on Self and Unconsciousness in Modern German Spiritualism

 研究代表者
 熊谷 哲哉 (KUMAGAI, TETSUYA)

 近畿大学・経営学部・准教授

 研究者番号：20567797
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、幽霊の存在や心霊現象の存在を信じ、人間の精神活動の死後における発展可能性を探求した、19世紀末から20世紀初頭にかけて心霊主義者たちの思想について、夢遊状態と二重人格という観点から、人間の魂や霊がどのように考えられていたかを考察した。
 とくに、哲学的な背景から、心霊主義ブームの代表者として活躍した、カール・デュ・プレルについては、雑誌・書籍など数多くの著作や書簡からその活動の全容を明らかにすることを試みた。さらに、デュ・プレルの思想が、明治時代の日本そして、現代ドイツ文学のモチーフへと影響力を持ち続けていることを明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、日本国内ではあまり研究が進んでいなかった、ミュンヘンの心霊主義サークルを代表した哲学者デュ・プレルと催眠研究者シュレンク＝ノッツィングを中心に、同時代の作家や知識人との関係を明らかにし、さらに明治期日本で活躍したドイツ語教師ケーベルとの関係についても一次資料から浮かび上がらせることに成功した。とりわけケーベルと心霊主義の関わりについては、日本はもとよりドイツにおいてもこれまで論じられていない。世紀転換期ドイツ文化と心霊主義、そして明治期日本における需要という新たなテーマへ足を踏み入れる際に、本研究は大きな手がかりとなることだろう。

研究成果の概要(英文)：In the late nineteenth and early twentieth centuries, spiritualists believed in the existence of ghosts and the reality of psychic phenomena and explored the possible development of human mental activity after death. This study examines how spiritualists considered the human soul and spirit, focusing on the phenomena of sleepwalking and dual personalities.
 In particular, I have attempted to elucidate Carl du Prel, the philosopher who was the representative of the spiritism boom in Germany, through his many writings in magazines and books, as well as his letters to and from his friends. Furthermore, I was able to show that Du Prel's thought influenced Japanese philosophy during the Meiji period, and that spiritualism continues to be an influential motif in contemporary German literature.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：心霊主義 文学 ドイツ 世紀転換期

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

フロイトの『夢解釈』が、夢や無意識の探求に新たな扉を開いてから、100年あまりが過ぎた。フロイトの時代から現在にいたるまで、人間の無意識は、自然科学、心理学などの研究対象としてのみならず、文学や絵画、演劇や音楽など芸術的創造のモチーフとして、また合理的な科学では測りきれないものとしてオカルトや新興宗教などの観点からも、人々の関心を集めてきた。本研究は、このような領域に関して、とりわけ夢遊状態と二重人格という世紀転換期に注目されていた現象を手がかりに、思想としての心霊主義の実像と、文学・芸術への影響から、自己や無意識がどのように考えられてきたのかを追求するものである。

これまで私は、ドイツの元裁判官で、1903年に『ある神経病者の回想録』を発表したダニエル・パウル・シュレーパーに着目し、その独自の宗教的世界観が、どのような背景から形成されたのかを探求してきた。シュレーパーは、著書の中で、自身の体が、神の光線によって、神の妻となるべく女性化され、傷つけられるという迫害妄想を展開している。シュレーパーについては、フロイトの論文「自伝的に記述されたパラノイアの一症例についての精神分析的考察」(1911)をはじめ、ラカン(1956)、ドゥルーズとガタリ(1972)など、精神分析理論の形成における重要な資料として読まれてきた。一方で、Kittler(1985)のような言説分析、臼井(1998)による神話学的な解釈、Israëls(1981)やLothane(1989)、Schreiber(1987)のように、伝記的事実や時代背景からシュレーパーの妄想を論じる研究もある。申請者は、これらの先行研究から、シュレーパーの妄想的世界像において、心霊主義と、大衆的な科学論が理論的な支柱として大きな意味を持っていることに着目した。シュレーパーが主に依拠したカール・デュ・プレル(1839~1899)は、在野の哲学者としてミュンヘンを拠点に活動し、精神科医シュレンク=ノッツィングとともにこの時代の心霊主義をめぐる言論の中心人物だった。亡霊の出現や、夢遊状態の人間の能力を探求する心霊主義は、ドイツ文学研究において、従来あまり重要視されてこなかったが、近年は、Kaiser(2008)や、Wolffram(2009)のようにドイツ心霊主義の文学史・精神史的研究や、Pytlik(2005)による、心霊主義とリルケ、トーマス・マン、デーブリンなどモデルネの文学者との関連についての研究もある。シュレンク=ノッツィングの催眠研究や物質化現象の研究に関しても注目が集まり、Kuff(2010)やDierks(2012)のような伝記的事実に着目しながら、心霊主義から超心理学の設立へと続く思考の痕跡を追求する研究もある。

申請者は、シュレーパーの妄想における、科学的世界観への信奉や新技術への期待という、科学万能主義と、心霊主義に代表される、超自然的な現象や不可解な自己への探求という、科学と非科学、合理と非合理が混在している状況を明らかにした。また同時に、シュレーパー的な合理と非合理が混在する精神状況が、彼一人のものではなく、同時代の思想家や文学者にも共有された問題であることを、具体例を挙げて示すことも試みた。以上の内容を博士論文としてまとめ、2014年には、同論文を加筆修正し、ドイツ語学文学振興会の助成金を得て、刊行した。(熊谷:2014)。

博士論文の刊行以後は、デュ・プレルとシュレンク=ノッツィングの著作の解読に取り組み、2015年には、ウィーンのオーストリア国立図書館で文献調査を行った。そして、その成果としてシュレンク=ノッツィングが1904年に行った「夢遊ダンス」の上演と二重人格についての研究が、夢遊状態と自我同一性の揺らぎというという問題を考える上で、重要な意味を持っていたことを示した。

2. 研究の目的

本研究では、シュレーバー研究から得られた、世紀転換期ドイツにおける心霊主義の思想的・文学史的な重要性に着目し、心霊主義者たちの言説から、とりわけ無意識や自己をどう捉えるかという問題に関して、心霊主義と文学・芸術などとの相互関係について考察する。

具体的に、研究期間内には以下のことを明らかにする。

1. 自我の分裂（二重人格）のモチーフについて。シュレンク＝ノッツィングの催眠研究と人格の変容やヒステリーをテーマとした劇文学（パウル・リンダウ、ヘルマン・バル）の関係から、二重人格の研究がどのように受容されたのかを明らかにする。
2. 夢遊状態というモチーフについて。デュ・プレルの思想における、夢遊状態の人間についての文献を収集し、また、同時代の雑誌記事などから、文学者によるデュ・プレルの受容について明らかにする。
3. デュ・プレル、シュレンク＝ノッツィングらミュンヘン心霊主義サークルの活動について。行われた実験や、メディアへの情報公開から、活動の実体とインパクトを明らかにする。デュ・プレルとシュレンク＝ノッツィングは後に決別するが、どのような見解の相違があったのを突き止める。
4. 心霊主義の19世紀から20世紀への変化。心霊主義からシュタイナーの人智学やデソワールの超心理学への移行と、生改革運動など、新たな人間と世界の間を模索した思想との関係について明らかにする。
5. 近代心霊主義の成立と思想史・文学史的な位置付けについて。ショーペンハウアーやE・フォン・ハルトマンの無意識研究、フロイトの精神分析や心霊主義批判と、心霊主義からの応答を分析し、心霊主義の歴史的な意味を明らかにする。

本研究では、上記5点を中心に、世紀転換期ドイツの心霊主義者たちの実像に迫り、そこから彼らがどのように、心霊現象を人間の魂や精神の能力と関係づけようとしているのかを探ることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、19世紀末から20世紀初頭にかけてのドイツ心霊主義において、自我と無意識をどのように捉えていたのかを、夢遊状態と二重人格のモチーフから考察する。以下の方法で本研究を進めた。

1) 心霊主義の中心人物であったカール・デュ・プレル、シュレンク＝ノッツィングの代表的な著作と、同時代の心霊主義と親和性の高い文学作品を読解する。2) 海外での調査を通じて心霊主義およびその受容についての同時代の雑誌記事や論文等の資料を収集する。3) 収集した資料から、夢遊状態と二重人格というモチーフが持つ意味と広がりについて、同時代の文学や思想との影響関係を調査し、心霊主義の文学史的・思想的な意義について考察する。

海外調査として、ミュンヘン、ウィーン、ゲッティンゲン、ベルリンなど各地の図書館・資料館を訪問し、一次文献や書簡などを閲覧し、またインターネットも利用して文献を収集した。これらの資料から、デュ・プレルおよびシュレンク＝ノッツィングを中心とするミュンヘン心霊主義サークルだけでなく、編集者ヒュッペ＝シュライデンや哲学者エドゥアルト・フォン・ハルトマン、さらには日本でドイツ語教師となったラファエル・フ

オン・ケーベルなど、この当時の心霊主義に関係していた多くの人物たちの実像に迫ることができた。

また、資料収集のさいには、海外の研究者との交流からさまざまなヒントを得ることができた。とりわけイギリスのアンドレアス・ゾンマーおよびドイツのトーマス・カイザーの両氏は、デュ・プレル研究の先駆者として、書簡の写しなどの資料を提供してくれただけでなく、有益な助言も得ることができた。

4．研究成果

本研究では、19世紀末から20世紀初頭のドイツにおける、デュ・プレルやシュレンク＝ノッツィングに代表される心霊主義者たちの思考を、夢遊状態と二重人格という観点から、彼らが人間の霊や魂をどのように考えていたのかを考察してきた。

とりわけ心霊主義ブームのドイツでの中心人物だった、デュ・プレルについては、雑誌や書籍、そして書簡から、その活動の全容を明らかにすることができた。また、デュ・プレルの思想や心霊主義が、哲学者ケーベルを通じて明治期日本にも伝えられ、また、現代ドイツ文学においても、心霊主義のモチーフが取り入れられていることを明らかにすることができた。

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 熊谷哲哉	4. 巻 9
2. 論文標題 文学作品をどのように講義に取り入れるか 「国際化と異文化理解」における試み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 近畿大学教養・外国語教育センター紀要・外国語編	6. 最初と最後の頁 83-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 熊谷哲哉	4. 巻 42
2. 論文標題 記憶と病 クリスティーネ・ヴニケの『狐と鳥邨博士』について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 希土	6. 最初と最後の頁 94-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊谷哲哉	4. 巻 50
2. 論文標題 夢・心霊主義・科学技術：1900年ころのドイツにおける状況と日本	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 熊楠works	6. 最初と最後の頁 24-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 熊谷哲哉
2. 発表標題 クリスティーネ・ヴニケにおける狂気とオカルティズム
3. 学会等名 ドイツ現代文学ゼミナール
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 熊谷哲哉
2. 発表標題 語学教育の方法を生かしたドイツ文学講義の試み 教養科目でどのように文学を取り上げることができるか
3. 学会等名 日本独文学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tetsuya Kumagai
2. 発表標題 The Influence of German Spiritualism on Modern Japanese Philosophy: Raphael von Koeber at Tokyo Imperial University
3. 学会等名 Science and Spiritualism 1750- 1930 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 熊谷哲哉
2. 発表標題 夢遊病と心霊主義 デュ・プレルとシュレンク = ノッツィングを中心に
3. 学会等名 プラハとダブリン、亡霊とメディアの言説空間 複数の文化をつなぐ《翻訳》の諸相 第3回研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 熊谷哲哉	4. 発行年 2019年
2. 出版社 朝日出版社	5. 総ページ数 53
3. 書名 ミニマムドイツ語	

1. 著者名 由比俊行編 由比俊行、藤原美沙、宇田川雄、福岡麻子、熊谷哲哉著	4. 発行年 2017年
2. 出版社 日本独文学会	5. 総ページ数 67
3. 書名 かけえがない とはどうか？ - 近現代ドイツ語圏文学における交換（不）可能性の主題 - 日本独文学会研究叢書Nr 128	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----